

## 個人空間の起源

—英国17世紀中期のカントリーハウス詩の一研究—

岡 田 宏 子

Origins of Private Space : A Study of English Country House Poetry in Mid-Seventeenth Century

Hiroko OKADA

英国の内乱は1642年に始まり1649年に前代未聞の国王チャールズ一世の処刑で終結した。それは近代の方向へ英国が向かい始めた、いわば歴史的な分水嶺であった。その後の17世紀の英国の歴史の潮流は共和制、1653年の護国卿体制の破綻、王政復古、そして名誉革命へと目まぐるしく変転し、18世紀の市民社会と呼ばれる時代へ流れ込んでいった。

1612年にジョンソン (Ben Jonson) の「ペンズハーストによせて」という詩を嚆矢とすると言われている一連のカントリーハウス詩の傾向は、1640年代に入るとそのジャンルの中心的なテーマの一つであった大広間におけるホスピタリティー、すなわち、領内の村落共同体の人々を招いて大広間で宴を催すという祝祭への言及の重要性がより減少している。<sup>1)</sup> ターナー (James Turner) は、1630年から1660年の王政復古期までは、田園詩が数多く書かれて、隠遁生活や庭園をテーマとする詩の質が向上した事実を指摘している。<sup>2)</sup> ファウラーやターナーと比較すると、田園詩の社会的政治的なイデオロギー性に対して意識的な地平は欠如しているとしても、レストヴィッヒ (Maren-Sofie Røstovig) は1640年代に入って、田園生活が田園への隠棲のシノニムになった現象を鋭く指摘している。<sup>3)</sup>

このような内乱から王政復古までの田園詩の隆盛の傾向とカントリーハウス詩の伝統の変容は相互に符合し、それはさらに、建築史的にも、建物としてのカントリーハウス内部において、中世的な大広間という多目的一室空間が個別的な用途を持つ多数の部屋への分節化を遂げる過程と重なっていると考えられる。英国において政治の最小単位は「家」であったとルネッサンス期のカントリーハウスについてマクラング (William A. McClung) は述べ、ケニイ (Virginia C. Kenny) は18世紀初頭には社会の最小単位である「個人」の概念が新しい倫理を必要とするほど英国社会は変化したと、名誉革命から18世紀半ばまでの英文学におけるカントリーハウス・エートスについての著書の中で言っている。<sup>4)</sup> 政治的な基本主体が、家から個人へと著しい変化を遂げた歴史的に重要な意味を持つ複雑な現象を簡単に論ずることは不可能である。本稿では、少なくともそのような大きな歴史の流れを念頭に、カントリーハウスの大広間のあり方が17世紀の半ばの20数年間の間に変化を遂げた事実に着目し、ファウラーの編んだカントリーハウス詩に収録されている1640年代から王政復古までのカントリーハウス詩を中心に、図式的であるにしても、カントリーハウスにおける個人空間の誕生の検討を試みるものである。

内乱は王党派と議会派間の王権と民権、専制と自由、旧秩序と新秩序との対立をめぐっての不可避の武力闘争であった。開戦後二年間は王党派が優勢であったが、1645年のニューモデル軍編成以来戦局は議会派の有利に傾き、多くの王党派の人々は強制的にせよ自らの選択にせよ田園へのカントリーハウスへ帰還した。スチュワート朝が始まって以来、何度も公布された帰郷令が殆ど実効をみなかったことを思えば、この事態は切実であった。

戦乱の最中、戦争の爪痕はカントリーハウスにも及んだ。小高い丘の上に立つカントリーハウスの立地条件は、戦陣の本拠地として最適であった。平和な時代には、村落共同体の人々へのホスピタリティーを象徴した大広間の御馳走の重さでしなったテーブルは、ことに騒々しきで響き渡った王党派の兵士達の酒盛りのテーブルと化した。

その一例は、当主のヘンリーが王党派軍の将軍であったため軍の陣の拠点となったレスター州の二大名家の一つ、ヘイスティングズ一族のアシュビー・キャスルである。この屋敷についてのカントリーハウス詩"General Hastings's Bower"を書いた詩人トーマス・ペステル(Thomas Pestell)は、スペイン、フランス、そしてドイツ産のワインを豪勢に振る舞われた兵士達の悪名高い酒宴を皮肉を少し織り混ぜて描き出す。

Cans wide as cannons doubly shine :  
They scorn to wrong the god of wine,  
To make a poor pint pot shrine.  
Here are full streams, pure, rich and clean,  
Of Spanish, French and Rhenish vein,  
And Hippocras for Hippocrene. (ll. 25-30.)

「大砲のように大きな金属製の取っ手のついたマグは、大砲より輝き、一パイント入りの酒瓶を神殿に奉まつて、酒の神を虐待するようなことは軽蔑する」軍人達の浴びるように飲む酒が、「純粹で、芳醇で清らか」であったであろうか。詩の女神ミューズのヒポクレネの泉への言及は、この詩の冒頭のスタンザから明らかなように、アシュビーが内乱の間も仮面劇の上演の劇場の役割も果たしていたことに由来する。

Of Muses' hills and princes' halls  
Of Louvres and Escurialls  
Tell no more tales at festivals :  
To silence all poetic power  
We sing hersing Henry's tower ;  
The sun ne'er saw so brave a bower. (ll. 1-6.)

仮面劇という祝祭の素晴らしさにおいて、いささか誇張が過ぎるとはいえ、壮麗な宮殿として名高い外国のルーブルやエスコリアルに英国のローカルなアシュビーを対置し、後者により高い価値を認める図式はジョンソンの伝統に則している。しかし、二つのスタンザの引用がいみじくも示すように、このカントリーハウス詩全体は、戦いと仮面劇のイメージ

に支配されている。「勇ましい館」という文武両道に秀でた当主の美德の賞賛には、「ペンズハースト」では詩の底流に隠蔽されていた戦いの要素が表層化している。<sup>5)</sup>

一見のどかな仮面劇のリハーサルも死への意識をぬぐい去ることはできない。野蛮な酒宴も戦いへの極度の緊張と恐れを一時紛らわす。当時三十代の初めで独身であったアシュビーの主に、彼はこの立派な屋敷を「自分の骨壺を入れる納骨堂 ("cloister closet", l. 36)」として役立てる積もりだと暗に結婚を勧め、愛の神ヴィーナスの加護を願う。しかし、ヴェルギリウス以来の伝統でありジョンソンも願った、賛美する屋敷の主人一族の末永い繁栄には、直接触れることはない。実は、この詩の作者自身、チャールズ一世の牧師も務めたのに、内乱の勃発後間もなくその職を辞した日和見主義者であったためか、彼の家は 1645 年以後には 11 回も略奪に合い、パトロンの屋敷、アシュビーに避難した。これも「ペンズハースト」と同じく屋敷へ滞在したことへのお礼の詩であるのだが、戦火をくぐって生きることが急務であった時、長期の時間への展望はカントリーハウス詩の言説の範疇を超えていた。ある一定の期間良く生きることが問題であったのだ。戦いと仮面劇の上演は一見無定見に見えるが、限られた時間を充実して生きる賢明な処世のすべであったかもしれない。

15 世紀に初代のヘイスティングズ男爵の建てた建築史上も価値のある高い四階建ての塔は、当時既に防御よりは豪華さを誇る目的で建築されたが、二世紀を経て塔本来の本丸的な面が役立ったのだ。その塔に竈って仮面劇の台本を書いたり、舞台を考案したのは、恐らく同じ貴族階級もしくはジェントリの人々であったのであろう (ll. 24-6)。「その偉大な魂は友情の世界にある」(l. 19) とアシュビーの主の "friendship" が特筆され、内乱といういわば冬の時代に同じ知的世界を共有する仲間への共感に支えられていた王党派のメンタリティーが浮かび上がる。

やはり 1640 年代に、戦列からは離れていたがノーサンプトン州の田舎に隠棲する自分の人生について、友人に書簡詩を書き送ったのは、第二代ウエストモアランド伯、ミルドメイ・フェイン (Mildmay Fane, second Earl of Westmorland) であった。王党派でありながら、議会で船舶税に反対したため宮廷の敵となり、投獄されたが危うく領地の没収は免れて、ファウラーの推定によれば、恐らく、アプソープ・ホールという自身の由緒あるカントリーハウスへ引きこもった。<sup>6)</sup> 彼は、ケアリーが「サクサム屋敷に寄せて」というカントリーハウス詩の名編を捧げたクロフツ家とも縁続きで、17 世紀最大のカントリーハウス詩と言すべきマーヴェルの「アプルトンハウスに寄せて」に登場する屋敷の主人である、議会派軍の勇将フェアファックスは義理の兄弟であった。内乱時の一族の中には、このように敵味方に分かれる現象も少なくなかった。ロバート・ヘリックをはじめ詩人の友人は数多く、ジョージ・ハーバートがケンブリッジで彼のレトリックの師であった。彼は劇作家でもあり詩も書いたが、詩作の多くは過少評価され、未だに手稿のままのものが多く。

"My Happy Life, to a Friend" はカントリーハウス詩のジャンルの最初の詩と同じく書簡の形式をとっているが、ローマ時代のカントリーハウス詩と同様に屋敷の所有者が自己の屋敷やその領内における自分自身の一日の生活のあり方や、生き方の信条を吐露している点で、ジョンソンとは異なり、むしろ後のマーヴェルの「アプルトンハウスに寄せて」の様式をを先取りしていると言える面がある。マーヴェルは、フェアファックスの一人娘の家庭教師であったので、ホッジ (R. I. V. Hodge) が推測するとおり、フェインの詩の手稿を読む機会

があったであろう。<sup>7)</sup>

深い敗北感を抱いて下野したフェインは *negotium* (勤勉) の世界から遠ざかり、*locus amoenus* (好ましい空間) ともいうべきアップソープ・ホールの *otium* (閑暇) の世界である田園の静謐に戻って、自己を見つめている。彼の 1648 年に編まれた詩集のタイトルは *Otia Sacra*『神聖なる閑暇』であった。「自然に導かれて」(l. 4) 領内を朝から逍遥しはじめ、日暮れと共に屋敷の中へ入るとい詩の枠組みは、後にマーヴェルが「アプルトンハウスに寄せて」において更に複雑に変容して用いた。

飽くことのない欲望や、権力の誤った暴力で所有地を拡張しようとするれば、争いがつきものである。そんな喧噪に満ちた生活への嫌悪の描写の背後には、アップソープでの隠遁生活にはいる以前の政治の世界でのおぞましい経験が潜んでいたのかもしれない。

Dearest in friendship

.....

Believe, it is not to advance

Or add to my inheritance;

Seeking t'engross by power (amiss)

What any man call his;

But full contented with my own,

I let all other things alone;

Which better t'enjoy without strife,

I settle to a country life;

And in a sweet retirement there

Cherish all hopes, but banish fear,

Offending none..... (l. 1, ll. 5-15.)

田園での生活は、彼が国会議員として政治活動をしていた時のように、夏の間だけのものではなく、本来の住居への帰還であったが、彼にとってそれは「楽しい」という形容詞はつくもののやはり「隠遁」に他ならなかった。時の権力に逆らって自己主張する行為の重味を知っていればこそ、恐怖の念や人の機嫌を損じることなく、希望を持って静かに暮らす生活の本質をかみしめていたのであろう。「頭のとっぺんから爪先まで無垢で武装して」身を守り、自分の時間を有効に使うと手紙の序論ともいうべき部分を結んでいる。

当時の自然秩序の探求は、人間を神の所有物と見なしていたので、フェインは一日のまず最初の時を神へ捧げ、その後の時間を自分にとって宝である読書や友人に委ねて自らの心を豊かにする。肉体の健康のためには、所領の中の森や川や牧場を散策し、その様子は「アプルトンハウス」のイメージと類似したイメージをカタログ手法を用いて子細に綴られる。その間の自然観照に基づく瞑想は、後のマーヴェルのように変転する情景を英国史の様々な相のアレゴリーを導き出すものとしてではなく、引用にも窺えるように、フェインが自己の所有を確認する一連の行為として読まれるべきであろう。彼は、自己の存在としての自律性が私的所有に基づくという認識をもっている。この詩の 9 行目にあるように、「自分の土地

に完全に満足して」こそ楽しい隠遁生活が営むことが可能になる。

野にあるために自律性が保証されて、自己の確固たる姿勢 ("stand", l. 3) を貫いて自由を享受する喜びを、フェインは「隠遁生活へ」 ("To Retiredness") という詩において擬人化された "retiredness" (隠遁生活) に対して、神に次ぐ「私の自由の偉大なるパトロン」とその恩恵を感謝している。

Next unto God, to whom I owe  
Whate'er I here enjoy below,  
I must indebted stand to thee,  
Great patron of my liberty..... (ll. 1-4.)

「見せかけの権力の家」対「実用と美德の家」というカントリーハウス詩のジャンルのもつ根本的な二項対立の図式は、フェインの詩において「行動の原理の家」対「瞑想の原理の家」のそれに変わり、家は主人の処世法を模索する場として機能している。

王政復古の時には、ノーサンプトン州の知事として再び地方政治という行動の原理の支配する世界に振り返ることになったのだが、内乱期のフェインには、隠遁生活で与えられたゆったりした時間の中での瞑想による内的自己の世界の凝視は、重要な意味をもっていた。それは、外の戦争の荒々しい世界から安らかな自己充足的な空間への逃避ではなく、一見無為に見える瞑想によって、時代に自己の思想が受容されない苦しみを耐え、「宮廷や当時盛んになった海外貿易がもたらす富や名誉よりも遥かに豊かなものを心の奥深くに得て」 (ll. 19-20)、自らの精神を鍛えることであったのだ。フェインは、「時代について」 ("Upon Times") と題する詩の中で「平和が近い」などと楽観するのは空想であると述べ、戦局についてかなり厳しい情勢判断をしていた。そのような時に敗北主義に陥らないで自己の節を堅持する、彼の精神の柔軟さを備えた逞しさを見誤ってはならない。

アソープ屋敷の領内の自然は、もはや豊饒神話の神秘的な世界ではなく、ルクレティウスの自然である。"My Happy Life, to a Friend"における孤独な散歩者は、森に猛禽の、川に川カマス存在を否定し、せめて領内には平和を望むなど、必ずしも寓意的な自然の解釈とは無縁ではない。しかし、17世紀には珍しい鳥を飼う流行があったが、フェインの鳥類図鑑的な森の鳥の名前の列举の方法は、自然の観察者の視線によるものと言えよう。

教会の音楽にも優る鳥の轉りを聞きながら、樹陰は恰も瞑想のための緑の部屋であるかのような、私的な瞑想空間に変容している。"To Retiredness"においては、「神の神秘的な被造物」 (l. 22) である樹木は自然現象の妙についての教えを彼に垂れ、神への感謝の念を心に植え付けてくれる師となる。まだ、この頃は、依然としてルクレティウスの自然観察も天国に直結していたのであった。

Here I can sit, and sitting under  
Some portions of his works of wonder,  
Whose all are such, observe by reason  
Why every plant obeys its season;

How the sap rises, and the fall,  
Wherein they shake off leaves and all;  
.....  
Which whilst my contemplation sees,  
I am taught thankfulness from trees. (ll. 21-26, ll. 29-30.)

"My Happy Life, to a Friend"においては、夕暮れになって家へ戻る主人が、通りすがりに乳搾りの女が歌いながら牛を宥めて乳を搾る、自然と調和した労働の姿を横目で見ると。かつては、大広間の宴に招かれた彼女は今彼の視線と聴覚の対象物にすぎない。木陰の鳥の囀りと、乳搾りの女の歌声とどちらが彼の心を奪ったかと夢見心地で思いつつ、夜のとばりが降りると共に彼は家の内部へ帰還する。

... as the night draws on  
Its sable curtain, in I'm gone  
To my poor cell; which 'cause 'tis mine,  
I judge it doth all else outshine..... (ll. 149-152.)

長さを誇るギャラリーや、フェインの劇作を上演する音楽室兼劇場を備えた、16世紀に建てられたアソープ屋敷は、経済上の理由から改修がやっとであったらしく、その意味で彼は「私のみすばらしい家」と表現したのであろう。しかし、「それが自分の家であるので、わが家に優る家は他にはない」のである。埴生の宿の価値は、それが自己の所有にあるのだ。

「アプルトンハウスに寄せて」においてマーヴェルが夕暮れに領内の散策を終えて、屋敷に入る行為は、実は、邸内の主人の抱く瞑想の原理に決別をして、王党派の視点から見れば荒れ狂う外部の世界へ出るという逆説的な決意の表明であった。8) フェインのこの詩においては、それは、言葉の真の意味において、近代的な夫婦の愛情をを基本とする核家族のすみかであるホームへ安らぎを求めて憩うことであった。当時、国中で様々な破壊を行った議会派軍とは違って、領内の自然すら破壊をせずに「雨露がしのげ」「心を満たせる」(l. 153) 家に帰ってフェインが最初に会うのは、温かい家庭の象徴である暖炉の守護の女神たる妻である。

カントリーハウスへ貴族達もどおり、田園生活が始まると、今まで不可視であったカントリーハウス詩における女性の存在が浮上してきた。フェインは、妻を抱きしめキスをして帰宅の挨拶をする。彼女は泡立てたミルクにワインを入れた飲み物を用意して彼を迎える。二度の結婚で12人もの子沢山であった彼は子煩悩な父親で、彼らの生ある限り自分も生きたいと願う優しい感情を吐露している。

家系の保持を担う役割をもつ子孫としての子供の役割は、カントリーハウス詩において常套のトピックであった。しかしこの詩においては、そのような見地は見られず、子供は夫婦の人生に喜びを与える存在である。領内の果樹園の作物であるりんごやプラムを妻と夫がそれぞれとり、子供たちにも勧めると、彼らは両親の果物の贈り物のお返しに、暖炉のを囲んで暖をとり、無垢で純粋な楽しさという何よりの恵を与え、ここに家族の団欒が成立してい

る。大広間における村落共同体の人々との祝宴への言及は一切なく、その代わりに居間における親子間の相互の感情の交流がほのぼのと描かれ、カントリーハウスの生活が私的な求心性へ向かって変化していた傾向を明らかにしている。

カントリーハウスにおける小作人達への関心の低下は、根本的には農村への貨幣経済の浸透による。フェインには、最後の収穫の作物を飾った車に乗せて主人に届け、酒や食べ物を振る舞われ、彼らに支払いをする秋の収穫祭のリチュアルをテーマに "My Hock-Cart or Reaping Day" という詩がある。タイトルの「私の」に始まり、詩の中で一人称複数度を度々使って、収穫された農産物はおるか、農民の労働をも我がものと同一視する農業経営者の顔が見え隠れする。彼らのパーティーからは「仕事が忙しいので」 ("by business called away" l. 47) 飲み物を用意すると自分は抜けだそうとしている。地代も小作人から領主へ金で支払われるようになると、両者の間は疎遠になる傾向にあった。

このように、大広間はますますかつての機能を果たす場所ではなくなった。1650 年初頭に書かれた「アプルトンハウスに寄せて」の第九連にあるように、貧しい人々への施しも家の門前で行われ、彼らはアプルトンハウスの主人のノブレスオブリジェを象徴する "fronticepiece" (戸口上部などにつく装飾壁) である。それから 20 年後に描かれた「ティッチボーン家の慈善」という絵画には、ノブレスオブリジェはアイコンと化していた。<sup>9)</sup> 多分、エリザベス朝のままの建築様式のマナーハウスの大広間は村落の人々を収容するには狭すぎたのであろうか、彼らはその前庭に階層順位に従って集められ、ティッチボーン一族の家族から年に一度の施しを受ける様が描かれている。この一族は古来の貴族の美風を墨守したために、一世紀も前の古い建築様式を変えることもできなかったのだ。

それとは対照的に、時代の遥か先端を突き進んだ屋敷も以前からあった。乱雑で騒々しい召使い達との大広間における共同生活に辟易した貴族が、石造りの階段の発明と共に、主人家族だけのパーラーと称する部屋を二階にしつらえ、静かな食事を楽しむ始めたのを共同体の崩壊の兆しと察して、詩人ラングランドは早くも 14 世紀にその現象を嘆いていた。16 世紀になると、ハードウィックホールでは、大広間は家の軸線に対して 90 度の角度に設計され、構造上も意図的に純然たる玄関として作られた。村人へのホスピタリティーを司る「慈悲」や「正義」というノブレスオブリジェの行為は、トーマス・アクレイス作のアラバスターを素材とした彫刻の像として、ギャラリー等の立派な大理石の暖炉の装飾に使われていた。

このように、カントリーハウスにおける大広間の衰退現象は早くから始まっていたが、その進行はゆるやかで 17 世紀になって少し加速したのであった。そのいわば革命的な例は、貴族ではなく、ジェントリ階級のカントリーハウスであった。文化は中心ではなく、周縁から生じるのである。広間の機能の変質や、貴族、ことに田園への隠遁生活を余儀なくされた人々のプライバシーへの強い欲求をカントリーハウスの建物自体に構造化したのは、パークシャー州にあるロージャー・プラット卿の古典様式で建てられたコールスヒル屋敷であった。従来のカントリーハウスの実用の概念を更に進めて利便性に局限したのは、彼の限られた経済力のせいでもあったが、内乱中はことにイタリアで修行を積んだ彼のいとこのジョージ・プラットの設計プランに負っていた。

1650 年代の初めから建築が始まり 1662 年に完成した地下一階をもつ二階建てのコールス

ヒル は、全体の矩形が中廊下を挟んで部屋は南北二列に配列され、設計者はそれをダブルパイルと称した。このカントリーハウスの建築史への大きな貢献には、女性の証人が存在する。シーリア・フェンズ (Ceilia Fiennes, 1662-1741) は、17 世紀末から 18 世紀初めにかけて、楽しくかつ精力的に英国内を旅し、デフォーに先駆けて価値ある旅行記を残した。1697 年にコールスヒル屋敷を訪れた印象を次のように述べている。

Over this runs a gallery all through the house and on each side severall garret roomes for servants furnished very neate and genteel.....<sup>10)</sup>

フェンズは"gallery"を corridor (廊下) の意味で使っており、それが家の端から端まで通っているのに感嘆している。中世の家には廊下はなく、エリザベス朝以来廊下の萌芽と言えるギャラリーは見られたが、ここに初めて家を横断する中廊下が出現した。<sup>11)</sup>

この設計には、夏は涼しい北側に一列に配列された部屋を、冬には温かい南側の部屋を使用するアメニティーへの配慮があり、家族の成員個々のプライバシーの確保も可能となった。<sup>12)</sup> また、以前から徐々に進行した家族からの召使いの隔離も、一段と増した。フェンズの眼は鋭くその点を見抜いている。家族の住居部分である一、二階の端には召使い用の小部屋が清潔に、上品にしつらえられて、主人一家は快適で迅速な召使いのサービスの享受が保証されることとなった。

またここでは、16 世紀の頃よりステイタスシンボルであった豪華な正面階段が、客を二階の客間であるグレート・チェンバーへ導くために一階の大広間にあたる空間に設けられたため、召使いはそこで食事をとることができなくなり、地下の台所脇の使用人ホールへ追いやられた。裏階段という召使い専用階段も各階の両端にできて、召使いの姿はカントリーハウスにおいて不可視の存在となった。この事態は、貴族の家の使用人がジェントリからヨーマンへと階級的に下方へと変化した時期と軌をを一にしている。

カントリーハウスの家政婦の息子として、地下の使用人ホールから見上げる視線でシニカルにカントリーハウスを観察した H. G. Wells でさえ、*Tono Bungay* においてカントリーハウスが国家のまた都市の象徴であると認めざるを得なかったように、コールスヒル屋敷における中廊下の出現が、ほぼ近代の住居の基本的な概念を形成したと言える。

召使いからの家族のプライバシーの確保に加えて、家族間のプライバシーが尊重できる環境が整い、個人の私室ができた時は、ファウラーの指摘する closet poem の 17 世紀半ばの流行とほぼ時間的に一致しているようである。このような詩の思想的な背景は、新しくおこってきた上層階級の理想の人の一つのタイプである「趣味人」(virtuoso) の尊重であった。closet または cabinet と呼ばれる小部屋の歴史はエリザベス女王のミニアチャの絵画の数々を秘蔵した部屋にまで遡るが、チャールズ一世朝になると、国王の絵画の蒐集に当たったポーター (Endymion Porter) 個人の所蔵の絵画のキャビネットの賛美をテーマにしたラヴレイス (Richard Lovelace) のカントリーハウス詩などが書かれ始めた。この詩については既に検討しているので、本稿では特に女性の文学の領域における趣味人の小部屋の詩を取り上げたい。<sup>13)</sup>

「ニューカッスル公爵夫人の私室について」 ("On the Duchess of Newcastle's Closet") は、



彼女の夫の庇護者であるフレックノー (Richard Flecknoe) が、恐らく 1655 年頃から 1670 年の間に書いたと推定されている。ニューカッスル公爵家のカントリーハウス、ノッティンガム州のウェルベック アビー内の、公爵夫人、マーガレット・キャベンディッシュの私室を題材としている。作者は、後にマーヴェルやドライデンにひどく風刺された二流詩人であるが、公爵夫人マーガレット・キャベンディッシュは今世紀も終わりに近づいて評価されようとしている詩人である。彼女は新しい科学の分野への興味を詩に表現した、かなり個性的な人物であつたらしく、同時代の日記作者ピープスと彼の妻の彼女への評価は低い。彼は、彼女にたいし "mad, conceited and ridiculous" とかたづけ、彼の妻は "airy, empty, whimsical and rambling" と手厳しい。やはり彼女の夫の庇護者の一人であつたホプズは、パトロンに対する礼儀か本音かは不明であるが、マーガレットを高くかっていた。

What place is this? Looks like some cell  
Where holy hermits anciently did dwell,  
And never ceased importuning heaven,  
Till some great blessing unto Earth was given!  
Is this a closet? 'T cannot be,  
For nothing here of vanity we see,  
Nothing of curiosity, nor pride,  
As all your ladies' closets have beside.  
Scarcely a glass, or mirror in't you find.  
Excepting books, the mirrors of the mind. (ll. 1-10.)

フレックノーは、当世の女性達の私室とニューカッスル公爵夫人、マーガレットのそれとを比較して驚きを隠せない。両者の差異は、この世的な女性の虚栄の部屋とこの世を捨てた隠者の庵の僧院の一室の間のそれである。人の好奇心を誘うような珍しい品々、自尊心を満足させるような素晴らしいものはおろか、鏡一枚も置いていない簡素な「神聖なる部屋」である。鏡は化粧という人工によって女性の実体ではなく、見せかけの姿を映し出す。彼女の存在の根源の精神は、物質化された鏡の映像の中に雨散霧消する。17 世紀の女性詩人の草分け的なニューカッスル公爵夫人マーガレットは、自らの心の鏡を書物の中にもっているのである。

フレックノーはどの程度意識的であつたかはわからないが、少なくとも彼女の博学や作家としての才能を認めていたようだ。ヴァージニア・ウルフの主張を 17 世紀に既に実現した女性のもの書きは、彼女であつた。自己に属する空間があつて、自己固有の創作活動が可能になったのだ。

... each place where she comes a library,  
Carrying a living library in her brain  
More worth than Bodley's of the Vatican.  
Here she's in rapture, here in ecstasy,

With studying high and deep philosophy:  
Here those clear lights descend into her mind,  
Which by reflection in her books you find..... (ll. 12-18.)

ニューカッスル公爵夫人マーガレットの創作原理は科学に興味を抱いた人らしく、"I rather chose to leave the *Elegance of words*, than to obstruct the sense of the matter." と 1653 年に出版された *Poems and Fancies* の中で述べている。<sup>14)</sup> 鏡に映るイメージよりは実体を、言葉の優雅な表現よりは、ものごとの本質を追究した女性の、簡素なまでに当時の常識的な女性性を削ぎ落とした知的精神と創造の部屋が、シャーウッドの森の窪地に建つウエルベックの一角を占めていた。

ニューカッスル公爵夫人マーガレットのこのような部屋はむしろ例外的であったかもしれない。17 世紀の趣味人の部屋は、グロテスクなまでに富に飽かした絵画のコレクションや、古今東西の珍品の雑多な集合に宝石類、そして不釣り合いな高級な文学の作品を取り混ぜて一同に集めた「驚異の部屋」の類に属するものが多かった。そんな部屋の 하나가、ジョージ・マッケンジー卿の書いたカントリーハウス詩に描写された、スコットランドのファイフにあるルーチャーズ城内のカーネギー公爵夫人アナ・ハミルトンの部屋であった。1638 年にジョン・トラデスキヤントがロンドンに建てた「驚異の部屋」は英国のみならずヨーロッパの流行であったらしい。<sup>15)</sup> スコットランドの辺境の地で、その流れに素朴な参加をしたアナ・ハミルトンは、多額の持参金をもって結婚し、様々な蒐集品で世界の知を一つの小空間に閉じこめようとするバロック的な試み自分の小部屋で行ったが、結婚の破綻によりそこを出て、外国で一生を終わった。自己に忠実に生きる道が、自己の存在を規定していた「驚異の部屋」をも失うことになったのだ。

政治の最小の単位が家であった時代から、廊下の出現というカントリーハウスの内部空間の分節が、主人一家と召使い達の間、主人の家族のメンバーのそれぞれの間の物理的及び精神的な距離を分けて、個室の確保が可能になりプライバシーへの欲望は満たされていた。一方、大広間は、カントリーハウスの構造の中で中世的な祝祭空間としての役割を喪失し、召使いは地下室と裏階段へ姿を消し、小作人も執事の部屋で金銭的な交換を果たすのみとなり、カントリーハウスの村落共同体や使用人との絆は薄れていった。このように農民との関係がビジネスライクになると、上層階級の人々の間では、同じ階級内で、教養や趣味を深めることによって他の人との差異化を図ろうとする志向が強くなった。食卓でのマナーにせよ、フランスで発明されたナイフとフォークを使い、従来のように共同の食器からではなく、銘々の皿から食べる作法が定着して、人々は他人の身体からの分離を経験し、身体的にも個人が誕生する過程は着々と進んでいた。

主人一家と村落共同体の完全な地理的分離は、当然様々な他の要因にも影響されているが、18 世紀の風景庭園の出現を待たなければならなかった。

注

- 1) Alastair Fowler, *A Country House Poem : A Cabinet of Seventeenth-Century Estate Poems and Related Items* (Edinburgh, 1994), 19.
- 2) *The Politics of Landscape* (Basil Blackwell, 1979), 1.
- 3) *The Happy Man : Studies in Metamorphoses in Classical Ideal*, Vol. II (Oslo, 1971).
- 4) McClung, *The Country House in English Renaissance Poetry* (California, 1979), 105. Kenny, *The Country House Ethos in English Literature 1688-1750 : Themes of Personal Retreat and National Expansion* (Harvester, 1984), 3.
- 5) Malcolm Kelsall, *The Great Good Place: The Country House and English Literature* (Harvester, 1993), 40-41.
- 6) *Ibid.*, 212.
- 7) *Foreshortened Time : Andrew Marvell and 17th Century Revolutions* (Brewer, 1978), 118.
- 8) 岡田宏子, 「「アプルトンハウスを歌う」の一解釈一家の表象をめぐって」, 椋山女学園大学研究論集, 第12号第1部
- 9) Malcolm Kelsall, *The Great Good Place: The Country House and English Literature* (Harvester, 1993), 44-45, 116.
- 10) *The Illustrated Journals of Ceilia Fiennes 1685-c. 1712*, ed. Christopher Morris (Macdonald, 1982), 47.
- 11) 片木篤, 『イギリスのカントリーハウス』, (丸善, 昭和63年), 57-59.
- 12) Colin Pratt, *The Great Rebuilding of Tudor and Stuart England* (UCL Press, 1994), 37-39.
- 13) 岡田宏子, 「個人空間の起源—英国17世紀のカントリーハウス詩再考—」, 椋山女学園大学研究論集, 第28号第1部
- 14) Margaret J. M. Ezell, *Writing Women's History* (John's Hopkins, 1996), 127.
- 15) 高山宏, 『魔の王が見る, バロック的想像力』, (ありな書房, 1994年), 11-33.